

無神論の無言の宣伝は破壊工作として行われている：いったい誰が何を滅ぼしたいのか？

Greatchain

August 26, 2024

私と協力者がこのブログを、十数年も続けてきた背後には、よく引用してきた聖書の教えがある。それは「マタイによる福音書」13章の「よい麦と毒麦」の譬えで、読者の多くの方は知っておられるであろう。これは、イエスが自分で作った喩え話を自分で説明するという、珍しい形の話だが、2千年後のこの瞬間でも、いや、むしろ時間が経つほど貴重な、不思議な内容のたとえ話である。

簡単に説明すると：——ある農場主のもとへ僕たちがやってきて、夜中に「敵」がやってきて、我々の大切な麦の中に毒麦の種をまいていきました、どうしましょう、と言った。主人は慌てず「それはほっておけばよい、若い芽のうちは両方とも区別ができないが、やがて毒麦と判別できる時がくる。その時にそれを刈り取って束にして、燃やせばよい」と言った。そして「毒麦とは悪魔のことだ」と教えた。

この「敵」と訳されたものが問題である。これは adversary すなわち「敵対者」（神に敵対する者）のことである。領土や収穫物を狙う敵がやってきたのではない。それなら武器を取って戦わねばならないが、そんなことは言っていない。そういう敵なら、ひそかに毒麦を蒔いて逃げる、などという陰湿でタチ悪いことはしないだろう。そしてこの「敵」どもは、実は神を信じている神の敵である。

これはまさに、ほとんど無意識的にわが国で行われている、たちの悪い策略ではなかろうか？ わが国の新聞や報道者、そして識者と言われるある人々は、あたかも神や創造者が科学的に怪しげなものであるかのような、自信のないウソをついて逃げ回っている。彼らはこの時期、神を信じかけているのだが、それは「政治的に間違い」politically incorrectなので、一生懸命、権力者に迎合している。この権力者と言われる暗黒の者たちは、自分たちの隠し事について、恐怖のためにひたすら沈黙している。だから彼らが、もう持ちこたえられなくなって、「落ちる」のは時間の問題と言ってよい。今どき、現実の霊的な次元を、迷信だなどという者はいなくなっている。

とはいえ、彼らの勢力を決して侮ることはできない。新聞や報道は自分の考えを述べているのではなく、言えと命じられていることを、言っているにすぎない。だから今、世界的に起こっていることは、神を信ずる者と信じない者の戦いでなく、神を信ずる者と、神を敵視し憎悪する者たちの戦い、神とアンチ神＝〈神を殺せ〉と叫ぶ者たちの争いであって、無神論や唯物論などは口実にすぎない。

かりに彼らが主張している通りの宗教蔑視思想によって、幼い子どもを教育したとしたらどうなるだろう。それは確実に子供殺しである。恐ろしいのは、これを子供殺しとは多くの人が考えていないことである。彼らは「愛や思いやりを教える義務は我々にはない」などと言うだろう。確かにその通りである、義務ではない。しかし現在、そのような腐った理屈が、いかに我々の文化を形成し、我々の不幸を創り出していることか！

我々は一時、政府から「一億総ワクチン」政策を押し付けられた。それによってかなりの人が死んだ。しかしそれは世界的な政策によるものであって、何の問題もないものとされた。私はその頃（コロナの始まる直前に）「せん妄」という精神の異常な体験をし、入院中にいろんなことを知った。この病院は2つに分裂して対立しており、強硬派は、「医者に倫理も良心も要らない」という考えを世界に発信していた。ついでながら、私ものその犠牲になるところだった。

こういうことは医療だけでなく、現在、社会全体に蔓延しているのではないだろうか？ それはちょうど、ペドフィリアが「文化」と言われるように、人は特に何も感じなくなっているであろう。そしてこれこそ、人間を支配しようと思っている者たちの狙いである。彼らは銃や刀で我々を滅ぼそうとしているというより、こっそり「毒麦」を蒔いて、我々の精神を病ませ、衰弱させようとしている。そして完全な従僕として働いている。そう考えなければ、失礼ながら、我々の政府のやっていることが理解できない。彼らは「神を敵とする」という作業をそのまま行っている。

人は「卑劣」という感覚がなくなり「良心」を失い、死者への礼さえ亡くしたとき、**自分自身を失う**であろう。では何のために生きているか？ しかしアメリカの戦争では、そういうことが常時起こっている。私は「モスルの血の池」という徹底した人間破壊の有様を報告したエッセーを、何度か翻訳掲載している。これを読んで、ただ腹を立てるのではなく、これは宗教とどう関係しているのか、なぜこうなるのかを考えていただきたい。

<https://www.dcsociety.org/2012/info2012/170729.pdf>

先日、トランプ大統領候補が射殺未遂事件に遭った。これはアメリカ歴史の大事件であるのに、大きく報道されなかった。「誰かがトランプ暗殺を謀った、それは未遂に終わり、犯人は殺されたのだから、それでいいではないか」という調子だった。それでよくはない。

まず、これが単独犯とはほとんど考えられない。誰かが計画したものであろう。そして彼がしゃがんだ瞬間、弾は耳を傷ついただけで、奇跡的にそれた。こういうことが偶然、しかも米大統領という要人に起こることは考えられない。これは「神の介入」と考えるべきであろう。そんなことが起こるはずがない、と言ってはならない。そこには、この大統領選全体に対する神の意志が込められている、と考えねばならない。

私が十数年前、初めてトランプが記者に逆らって、プーチン擁護をして以来、ずっと予言していることがある。それは、この世界的混乱は、トランプ大統領とプーチン大統領が協力することによって、初めて解決されるということである。そこには、これも何度も引用した——きわめて敬虔なキリスト教徒だ——預言者エドガー・ケイシーEdgar Cayce (1877-1955) の、「紆余曲折を経たのち、(共産主義などとは関係なく) 希望の光はロシアから差してくる」という言葉がずっと頭にある。